

生徒が意欲的に参加する社会科授業の研究

—「教えて考えさせる授業」を活用して—

教職実践基礎領域
山田遥平

I はじめに

「高校でサッカー部の指導がしたい。」
私が教師を目指したきっかけである。大学時代、母校や地元のクラブチームでサッカーの指導を行っていた。そこでは、様々な性格の生徒たちと関わることができた。その生徒に力を付けさせるためにはどのような教え方をすればいいのか、どのような声かけや支援をしていけばいいかを講習会に参加して学んだことなどを参考に、自分なりに工夫して取り組んだ。この経験により、生徒との関わり方について、多くのことを学ぶことができた。

大学4年生の教育実習で、初めて生徒の前に立ち、授業を行った。しかし、生徒に「授業がつまらない」と言われた。これまでの経験から、生徒を楽しませることなど、生徒との関係づくりには自信があった私にとって、すごく悔しい経験であった。この経験があったからこそ、「教師になるのであれば、授業ができないと意味がない」ことに気が付くことができた。一度真剣に教育について学び、生徒の学習意欲を引き出し、「先生の授業は楽しい」と言ってもらえるようになりたいと考えた。このことが教職大学院に入学するきっかけである。

また、教師を目指す上で私にはこだわっていることがある。それは、「地元・岐阜で教師になること」である。このことにこだわる理由は、「岐阜の子どもは岐阜で育てる」と考えているからである。私の周りでは、中学校卒業後に県外の高校に進学してしまう生徒も少なくない。これでは、岐阜のためではないと感じていた。どの分野においても、岐阜県出身者が活躍することを目指していきたいと私は考えている。これを実現するためには、魅力ある学校づくりが必要となる。岐阜で活躍できる人材を育成すること、また、岐阜で育った人材が日本や世界で活躍できるように、教育を行っていきたいと考えている。

II 主題設定の理由

1 ゼミでの実践分析

毎週行われるゼミ活動の中で、社会科授業の実践書である『中等社会科の理論と実践』を使い、中学や高校で行われている社会科の授業実践の分析を行った。その中で、社会科の授業づくりについて学んだ。体験活動や実物教材を用いた授業づくり、討論授業などを取り入れた実践を行うことで、単に知識を学ぶだけで

はなく、生徒たちに「実感」を持たせることができる。このような授業づくりをしていくことで、生徒の興味・関心を引き出しながら、力を付けていくことができると学んだ。

しかし、現状として、中等教育における社会科では「受験」を意識した授業を行わなければならない状況がある。また、教科書に沿って授業を行うと、教えなければならない内容が非常に多くなる。そのため、教師が一方的に授業を進める講義形式の授業が展開されていることが非常に多いと感じる。私はこのことを中学校や高校時代の経験や学校サポーター活動などを通して実感している。

これからの社会は、変化が激しい「知識基盤社会」と言われている。知識基盤社会を生き抜くためには、基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得し、自ら社会に参画していくための資質や能力が必要となる。この資質や能力が「公民的資質」であり、これを育成することが社会科のねらいである。

『現代教育方法辞典』では、「基礎とは、子どもの現在および将来のあらゆる生活に必要とされる知識・技術・技能であり、基本は教科に対応する学問・文化領域の中で適応範囲が広く、それをもとに多くのより高度の知識等が構成される。」とされている。基礎・基本が生涯にわたる学習の基礎・基本となるという事実を授業実践を通して積み上げることが求められる。生徒がこのような基礎的・基本的な知識を確実に習得し、授業を通して、「公民的資質」を身に付けるためには、講義形式の授業から脱却し、社会参画に関する学習を重視した授業づくりを行わなければいけない。

一時間の授業や一単元の中で、生徒の学力を保障し、基礎的・基本的な知識の定着を目指すこと、公民的資質を養うために、社会参画を目指す学習を行うことのバランスの取れた授業づくりを考えていくことが必要であると考えようになった。

2 生徒へのアンケートによる意識調査

5教科において、社会科は「暗記科目」としてのイメージが強い。人物や年号、出来事など学習しなければならない内容が非常に多い。中学校でこれらの内容を規定の授業時数の中で網羅するためには、どうしても講義形式の授業でなければ、内容をすべて終わらせることが難しいという現状がある。このため、生徒たちにとって社会科を学ぶ目的がテストのために暗記することとなってしまっている。

研究を進めるにあたり、生徒たちが社会科をどのように捉えているのかについて事前にアンケート調査を実施した。このアンケートでは、5教科に対するそれぞれの捉え方を4つの質問に対して、5段階評価で回答してもらった。このアンケートの対象は、学校サポーター校の1年生2クラス（合計61人）である。

「それぞれの科目では、覚えること（暗記すること）が多いですか？それとも少ないですか？」の質問に対して、社会科で覚えること（暗記すること）が比較的多いと回答した生徒は39.3%、覚えること（暗記すること）が多いと回答した生徒は49.2%であった。全体の88.5%の生徒が覚えること（暗記すること）が多いと感じている。

「それぞれの科目の授業で考えることや考える時間は多いですか？それとも少ないですか？」の質問に対して、社会科の授業では比較的多いと回答した生徒は32.8%、多いと回答した生徒は13.1%であった。合計すると45.9%になるが、他の4科目と比較すると二番目に低い数値となった。

また、社会科が覚えること（暗記すること）が多いと感じる理由として、「歴史と地理があるから」、「いろいろな人物がでてくるから」、「難しい言葉が多い」、「国名とその位置を覚えなさいといけなから」、「歴史上の人物と出来事を結び付けて覚えなさいといけなから」などが生徒たちの回答した理由として挙げられた。

これらの結果から、生徒たちは、社会科を学ぶにあたり、人物や年号、出来事などを覚えることに時間が取られていることが分かった。また、社会科の授業では、覚えること（暗記すること）が非常に多くあると生徒が感じており、ある事象について考える時間が十分に保障されていないことが分かった。このようにただの知識の注入となっている授業形態では「公民的資質」を養うことはできない。また、このような授業では生徒たちも、意欲的に授業参加することはできない。意欲的に授業参加をするためには、生徒たちが積極的に発言をすることや、学習内容について考えるなど自ら学ぶ姿を引き出す授業づくりをしなければならない。それを踏まえて、授業の中でポイントとなる知識を習得しながら、生徒たちがある事象について考えることができる授業づくりを行っていくことが必要であると感じた。その中で出会ったのが、市川伸一が提唱する「教えて考えさせる授業」であった [市川 2008]。

Ⅲ 主題に関わる授業の構想と方法

1 「教えて考えさせる」授業の考え

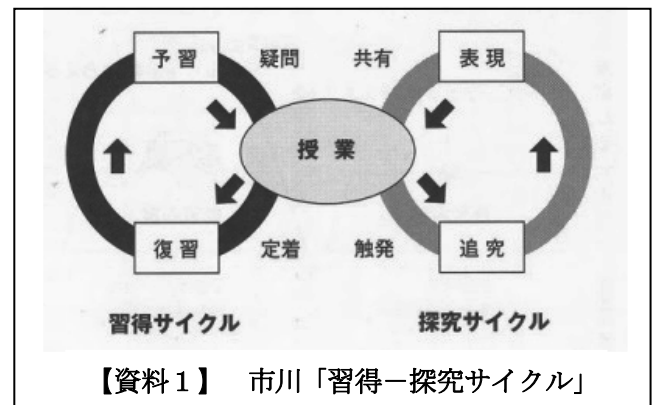
(1) 市川伸一「教えて考えさせる授業」論

今の日本の教育では、教師が一方的に説明していく「教え込み」の授業が否定されている。その結果、教師があまり教えずに、子どもに考えさせる「教えずに

考えさせる授業」が良い授業であるとされている。これは、「問題解決型授業」の広がりを通じて、全国の学校現場で取り入れられている。

しかし、このような授業では、先生が説明してあげることが生徒にとって「分からない」ことに繋がってしまう。本来、問題解決を目指した授業であったはずなのに、基礎的内容を理解できない生徒が生まれ、ましてや、発展的な課題に取り組むことはできない。このような状況では、生徒に力を付けることはできない。人間がものを考える時に、知識がなければ考えることができない。知識を習得し、その知識をもとに自分で考えることが学習することである。そのためには、「教師が教え、それを理解した上で、考えていくことができる授業」を創らないといけない。この考えから「教えて考えさせる授業」が生まれた。

教えて考えさせる授業には二つのサイクルが存在している。「予習—授業—復習」を行い、既存の知識や技能の習得を目指す「習得サイクルの学習」と、問題を追究する「探究サイクルの学習」である。市川は「習得サイクルの授業では、授業目標を設定する、教材研究を行い、課題を与えるのはあくまでも教師である。」と述べている。また、「探究サイクルでは、問題設定の主体は子ども自身であり、興味・関心に沿った問題を選ぶ。その問題への追究活動を支援することが教師の役割である」と述べている。この二つのサイクルはそれぞれが独立したものとして存在しているのではなく、習得サイクルで得た知識をもとに探究活動を行う中で、必要を感じて、基礎・基本である習得サイクルに戻ってくるように、この二つのサイクルのバランスを取り、結びつきを考えていくことが重要となる（資料1）。



【資料1】 市川「習得—探究サイクル」

教えて考えさせる授業の基本的な流れとして「教師説明→理解確認→理解深化→自己評価」の4段階が存在している。

①教師説明

教師説明では、教師が未習事項を分かりやすく丁寧に説明することである。教科書を読んで、一方的な説明をするのではなく、わかりやすく丁寧に教えることで生徒の理解に繋げる。正しいことをただ伝えるのではなく、生徒たちが誤解をしていそうなことを取り上

げ、注意を促すことも大切となる。ここでは、前提として、教科書を活用する。生徒にとって、教科書は共通して使用でき、最も身近にあるものである。これを活用し、教科書を理解することができるように丁寧に説明する。しかし、教科書を理解することがゴールではなく、教科書の内容を土台とし、さらに理解を深めることや発展的な課題を行うことを目指す。

授業に入る前には「予習」を行う。「予習」と言っても、生徒に完璧な理解を求めるのではなく、その授業において何を行うかを理解させること、授業で習得したい知識をなんとなくわかる状態にしておくために取り入れる。必ずしも「予習」を行わなくても、授業の冒頭で教科書を読むことでも良い。

わかりやすく説明するための具体的な手立てとして、授業の中で用いる教材として、手で触れて扱うことができる具体物を用いることや、映像や図などをTVに映し出したりするなどのICTを活用することなど、生徒にとってイメージしやすく、わかりやすい説明を行えるように工夫をする。また、教師と生徒との「対話」によって授業を展開することも大切である。これは教師とやり取りをしている生徒だけでなく、そのやり取りを見ている生徒も教師から学ぶことになる。「対話」による授業展開は、主体的に授業に関わる生徒の姿や意欲的に学ぶ姿を引き出すことができる。このような手立てを授業に取り入れることで、次の「考えさせる」ために必要な知識を習得させる。

②理解確認

「考えさせる」の第一ステップとして、理解確認を行う。教師説明において習得した知識をさらに深め、生徒自身の思考を整理するために生徒同士の相互説明や教え合い活動を行う。この活動を行うことによって、教科書や教師の説明したことが理解できているかを確認させることができる。

具体的な手立てとして二点のことを挙げる。一点目はペア学習やグループワークを通して、説明し合うことや学び合う活動を行う。本当に知識を理解できていると、周りに説明することができる。自分では「分かった」と思っている、隣同士で話すと、上手く説明できないことがある。友達に説明できることを基準として、自分自身で理解できているかを評価する。そこを確認し合うことで知識の定着を図る。二点目は、付箋やメモ用紙を用いて、理解できていないことや疑問に思ったことを書かせることである。このようにすることで、分からないところが明確になり、教師が支援を行いやすくなる。このことが理解に繋がっていく。このような方法を取り入れることで、生徒自身が自己理解を行うことができ、それが知識の定着へと繋がっていく。

③理解深化

習得した知識を活用して、小グループなど協同で課題を解決していくことで理解を深める。ここで、どのような課題を設定するかが「教えて考えさせる授業」の成否を左右する。課題を設定する上で大切なことは「生徒にとって考えがいのある課題」であること。設定する課題としては、ア) 生徒が誤解しそうなことを提示すること、イ) 習ったことを使って発展的な課題を考えること、ウ) 教えてもらった技能を考えながら習得することが挙げられる。アでは、正しいことを教えても、生徒は誤解しがちである。そのようなことに対して、生徒自身が、実測したり、理論的に考えたり、討論することを通して、自らの誤解を修正していくことができるような学習課題を設定できると意義がある。イでは、既習事項や本時で習得したことを使って発展的な課題を考えることである。これは、理解深化と言うよりも、活用・応用・発展的であるが、自分が学習したことによりどのような意義があるかを知ることができる。ウでは、実技科目の技能の習得において適応しやすい。基礎・基本を教えてもらい、頭の中ではわかっていても、なかなかスムーズには使えるようにはならない。そのため、自分なりに頭で考えながら身に付けていくことができるような課題の設定が必要となる。

④自己評価

最後の段階として、自己評価活動を行う。いわゆる「ふりかえり」であるが、単なる感想ではない。この活動のねらいは、「自分が理解したことはなにか。」や「まだよくわからないところは何か。」など、自分の状態を自分自身で理解できるようなメタ認知を促すことである。また、生徒だけでなく、教師も生徒の理解度を把握することになり、授業をどのように展開していくかを考えることに活用することができる。

習得を目指した授業において、以上の4つの指導段階を取り入れることで、生徒は繰り返し学習することができ、知識を確実に習得することに繋がる。

教えて考えさせる授業とは、他者から得た情報を理解して自分の知識体系に取り入れる「受容学習」を行い、そこで獲得した知識を活用して、「問題解決学習」をより有効的に行う授業である。つまり、すべてのことを生徒の自力解決に任せるのではなく、教科書などを使い、知識を習得し、理解確認し、理解深化で課題解決に取り組むというものである。

(2) 林久人「教えて考えさせる授業」

林久人が「教えて考えさせる授業」を取り入れた授業づくりを行っている。[林 2015]
この実践では、社会科授業に「教えて考えさせる授業」論を取り入れて、習得と活用とを結びつける「活用力」を生徒が身に付けることができる授業を提案している。林は「活用力」について以下のような定義している。

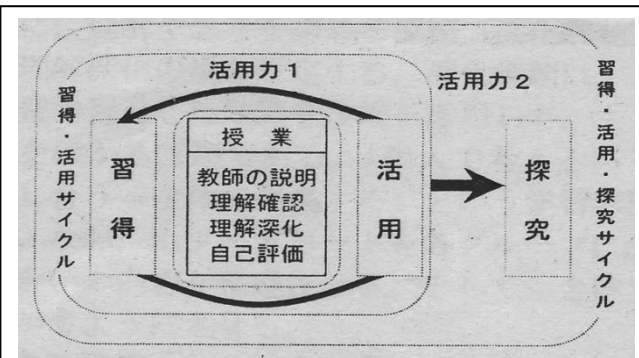
「活用力とは、社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させ、それらを活用する力や課題を探究する力である。」

この活用力を市川の活用についての考えを参考に二つの段階で捉えている。

「活用力1」：知識、概念や技能を習得と活用で行き来させ、それらを使いこなす力

「活用力2」：授業で学習した内容を生徒の生活レベルと結び付けて考えることができる力

市川の「習得と探究の学習モデル」にこの活用力1・2を位置づけて、「習得-活用-探究」学習モデルを作成し、市川の「習得サイクル」「探究サイクル」を、新たに「習得・活用サイクル」「習得・活用・探究サイクル」として提案している（資料2）。



【資料2】 林久人「習得—活用—探究サイクル」

研究を行うにあたり、習得・活用サイクルでは以下のような仮説を立てた。

教師説明や理解確認を通して、基礎的な知識、概念や技能を習得する。理解深化において、深化課題である理解や思考を深める課題を与え、それらを活用して習得をする。市川は「深化課題は、授業前半で得た知識を活用した問題解決場面を設定し、理解を深めさせる課題である。」と主張している。このような課題を毎時間取り組むことで、知識、概念や技能を習得と活用で行き来させ、それらを使いこなす力を育てることができるだろう。

習得・活用・探究サイクルでは、以下のように仮説を立てた。

「活用力1」を、探究課題を通して活用させて、生活レベルと結び付けて考えることができる力を育てることができるだろう。この課題は、生活に密着し、学習内容と社会問題と結びつけることができるような課題でなければならない。このような課題は、単元の最後に設定し、取り組むことで「活用力2」を育てることができるだろう。

また、林は単元全体で学習サイクルを構成し、活用力を身に付けさせることができるような単元構造を提案している。

この実践を行った成果として、習得・活用サイクルでは、二点のことが挙げられる。一点目は「教師説明→理解確認→理解深化→自己評価」の流れで授業を展開し、深化課題を設定することによって、生徒たちは、知識、概念や技能を習得と活用で行き来させ、それらを使いこなすことができたこと。二点目は、教師説明で生徒たちに共通の土台を作ることによって、グループなどの話し合いを活発にすることができ、グループでの話し合いでホワイトボードを取り入れることによって、根拠を明らかにしながら自分の意見を述べることができた。

習得・活用・探究サイクルでは、単元全体を「習得・活用サイクル」「習得・活用・探究サイクル」の2つの学習サイクルで構成し、探究課題を設定することによって、学習内容を生徒の生活レベルと結び付けて考えることができた。このように、「教えて考えさせる授業」を取り入れることで知識の習得を確実にを行い、活用させて、様々なことを考えることができたと言える。

課題としては、「深化課題」や「探究課題」を考えるためには、基礎的な知識や技能が土台となり、そのため、基礎的な知識や技能の習得をするためにより一層の指導が必要となること、他教科とも連携を取り、「活用力」を育成することが必要となることである。

(3) 実践研究の学習過程

教師力向上実習では、市川の「教えて考えさせる授業」や林の実践をベースとして授業実践を行う。本実践では、2つの学習サイクルの中でも、特に「習得サイクル」に重点を置き、生徒が知識を確実に習得できるような授業づくりを行う。

授業展開は、市川の提唱する指導の4段階である「教師説明→理解確認→理解深化→自己評価」で行う。

①ICTを活用した教師説明

課題をつかませるために、授業の導入において、教材の工夫を行う。生徒の生活の中に当たり前存在しているものを教材として用いることで、生徒の学習意欲を引き出すことや「なぜ？」を引き出せるように工夫をする。

次に、教師が説明する前には必ず教科書を読ませる。教科書を読むことで、太字で書かれているキーワードをおさえることができ、説明する前になんともわが状態を作ることにつながる。また、全員の知識を揃えることができる。

授業は、生徒との対話によって授業を展開する。一問一答のように生徒に投げかけていくが、キーワードを聞くだけではなく、その内容や背景を聞くことで、より深い知識の定着を図る。

わかりやすく説明するために、ICTを上手く活用していく。教師の説明だけでは生徒が理解しにくいことや、間違いやすいことなどに対して、写真や映像を用いることで、生徒にとってイメージしやすい状況を作

る。

②ペア活動を取り入れた理解確認

習得した知識を深め、生徒の思考を整理するために、生徒同士で互いに説明し合うペア学習を行う。学習した知識は、言葉にすることで定着に繋がる。周りの生徒に上手く説明できることを基準として、それができて、初めて「理解した」ことになる。はじめは、一問一答のように問題を互いに出し合うことで学習内容を整理する活動を行い、学習内容を上手く相手に説明する活動へと徐々に変化させていく。

また、自己理解をすることは、知識の定着において重要なことであるため、学習を進める中で、生徒が疑問に思うことに対して教科書の該当箇所に下線を引き、自分が何を理解できていないかを明確にする。

③学習形態の変化による理解深化

「深化課題」を設定し、理解深化の場を与える。その際、「個人→グループ→全体」と学習形態を変化させる。ここで設定する課題は、生徒にとって学習した内容を活用できるような課題を設定することで、知識の定着を目指す。

④学習カードを取り入れた自己評価

ふりかえりカードを活用し、自己評価を行わせる。授業の感想だけではなく、授業の中で理解したこと、疑問に思ったことを書かせる。

以上の方法を取り入れて、実践を行うことで、生徒が基礎的・基本的な知識を確実に習得することを目指し、一時間ごとの目標に応じた授業づくりを行っていく。

2 実習校の生徒の実態

愛知県公立中学校 第1学年3組32名
5組32名
計 64名

実践研究の対象となる学校サポーター校の生徒は、落ち着いた生徒が多く、何事にも真面目に取り組むことができる。特に学校として「あいさつ・清掃・歌声」に力を入れて取り組んでいる。実践の対象となる1年生の実態として、授業に対しては、教師の発問や指示に対して反応するなど、積極的に参加をすることができる。この地域の生徒は、小学生の時から「学び合い」に取り組んでいるため、ペア学習やグループ学習など周りの生徒と関わりながら授業を進めることができる生徒が多い。

しかし、自分の意見を表現することが苦手であり、他の生徒の前になると、発言を躊躇してしまう姿や、自分の書いた答えを他人に見られないように隠している姿、人の意見をそのまま自分の意見として受け入れてしまう姿などが見られる。そのため、授業を構成する中で、自分の意見をしっかりと持ち、それを発信していけるようにしていくべきだと考えた。

3 研究計画

実践研究を行った教師力向上実習では、地理的分野「アジア州」（6時間完了）を扱った。

「アジア州」という地域は、世界的に見ても経済成長著しい地域である。このアジア州の国々との繋がりは、これから私たちが考えていかなければならない課題である。そのため、目指す生徒像として、「アジアの国々と日本の関係について、継続的に関心を持ち続けることができる人」と設定した。

また、この単元では、単元を通して生徒に獲得させたい視点として、特に「経済成長」の視点を挙げるができる。その「経済成長」の視点を獲得できるような授業づくりを行うように計画を立てた（資料4）。

アジア州の概観をつかみ、アジア州の各地域の様子を見ていく。その中で近年、特に成長が著しい地域である「東南アジア」についての学習の際には、深化課題として、「なぜ東南アジアは急速に成長することができるのだろうか。」を設定した。東南アジアは、ASEANの成長や各国の工業化など、これから世界との関係を考える中で、非常に重要な地域となる。そのため、東南アジアについて考えることは、生徒にとっても追究する価値があると言える。

IV 実践研究の報告と課題

1 実践報告

この実践では、教師説明に入る前には、（資料3）のように、必ず教科書をペアで読むことを行った。こ

れは市川が言う「なんとなくわかる」状態を授業前に



【資料3】教師説明前の教科書音読

作っておくために行う。

①ICTを活用した教師説明

ここでは、第3時間目の「経済成長がいちじるしい中国とインド」の実践を取り上げる。

この授業の学習目標は、「中国とインドの工業化について知り、経済成長するための条件を考えよう。」と設定した。最初に課題をつかませ、学習意欲を高めるために、30年前の中国と現在の中国の様子をICTを活用して、比較させた。30年前の中国では、自転車に乗る人々が多く見られた。しかし、現在では、自動車に乗る人々の増加により交通渋滞が生じている。自転

めざす生徒像「アジアの国々と日本の関係について、継続的に関心を持ち続けることができる人」

① アジア州の特色について、自然、人口の面からとらえよう。

【授業段階】：教師説明→理解確認
【習得】：地形、季節風、人口分布

② アジア州の特色について、文化、産業の面からとらえよう。

【授業段階】：教師説明→理解確認
【習得】：アジアの文化、アジア NIES、AESEAN

③ 中国とインドの工業化について知り、経済成長するための条件を考えよう。

【授業段階】：教師説明→理解確認→理解深化
【習得】：人口政策、経済政策、ハイテク産業、IT 産業
〈深化課題〉：経済成長するためにはどんな条件が必要だろうか？
【理解深化】：外国の企業を受け入れる、経済を自由化する

④⑤ なぜ東南アジアは急速に成長することができなのだろうか。

【授業段階】：教師説明→理解確認
【習得】：二期作、プランテーション、工業化
〈深化課題〉：なぜ東南アジアの国々では輸出品目が変化したのか
【理解深化】：国内の工業化

【授業段階】：理解深化→自己評価
〈深化課題〉：なぜ東南アジアは急速に成長することができたのだろうか
【理解深化】：ASEAN で協力、外国企業の誘致、FTA の実施

⑥ アジアではどのような多様性が見られるだろうか。

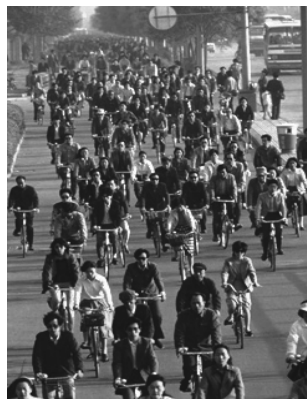
【授業段階】：教師説明→理解確認→自己評価
【習得】：OPEC、ドバイ、レアメタル、多民族国家

【資料4】 単元構想図 地理的分野「アジア州」（6時間完了）

車から自動車への変化という、生徒にとっても身近なものをを用いることで、中国に住む人々の生活が大きく変化したことを感じ取らせ、なぜ変化が起きたのか疑問を持たせることができた（資料5）。

次に習得すべきことについて教師説明を行った。この時間の中で習得すべきことは、「中国の工業化」、「経済特区の導入」、「インドの工業の成長」である。教科書に沿って、教師主導で生徒と対話をしながら行った。まずは、中国とインドにおける共通点として人口が多いことを取り上げ、それぞれの国において取られている人口政策について説明を行った。その際に、生徒がイメージしやすいように、日本の人口や自分たちが住む街の人口を示し、その人口の何倍かを考えさせることでより身近なものとして感じられるようにした。また、ICT を活用して、TV に中国で実際に掲げられて

いた人口政策についての看板の画像を映し出し、現地の実際の様子を感じ取らせ、それぞれの国において重要な政策であることを示した。次に「中国の工業化」について説明を行った。まず、中国が外国の企業を受け入れていったことで経済成長していったことに触れ、ペアになり、なぜ外国の企業を受け入れていくべきなのかを考え、全体場で生徒と対話をしながら説明した。また、「経済特区」を設け、外国の企業を受け入れるために税金を安くすることなど、教科書の用語解説も用いて説明を行うことで、更なる理解を促した。その後、経済特区に指定された「深圳」「厦門」「珠海」「海南」「汕頭」の都市がそれぞれどこにあるか地図帳を使って確認し、その都市における共通点をペアで考えさせ、海の近くで輸出に適した立地であることを示した。次に、中国の工業化に対比できるように「イン



「インドの工業化」について説明を行った。インドの工業化では成長著しい「情報技術産業」に視点を絞り、欧米企業がインド国内に進出する様子を対話的に説明した。その際に、生徒たちが知っている「Microsoft」など具体例を取り上げ、日常生活と結び付けた。生徒の反応を見ると、「それ知っている」

【資料5】 中国の人々の生活の変化

などの反応があり、理解に繋げることができた。また、インドの工業化の背景には、インドの「教育水準の高さ」がある。このことを生徒に実感させるために、インドでは掛け算の「九九」を学習する時、20段まで学習することを説明し、自分たちと比較させることで、「それすごい」や「そりゃ頭良くなるよ」などの声が聞こえた。

この他の時間では、「Google Earth」を使用し、世界の国や都市の実際の様子を見せることで、「地理はイメージができない」という生徒が理解しやすいように説明を行った（資料6）。また、グラフや統計を用いて、



【資料6】 「Google Earth」を活用する

文字や数値を様々な国で比較できるようにすることで、生徒が違いを感じ取ることができた。また、「急速に変わる東南アジア」の授業では、生徒たちの教室に存在するもので東南アジアで作られたものを見つけさせたところ、「日本と東南アジアって結構繋がりががあるんだ」

という生徒の声が聞こえた。遠い世界の学習から、生徒の生活に近づいた学習になり、生徒たちが授業に意欲的に参加するきっかけとすることができた。

このように、一方的な説明にならないように、教師主導の対話を用いて説明を行うことや、話をするだけの説明ではなく、ICTを活用することや具体物を用いることで生徒が目で見えたり、実感できたりするように説明に用いる教材の工夫を行った。ここに用いる教材については、教科書に載っているものだけではなく、教師自身が十分に教材研究を行うことで見つけた教材を用いることが必要である。このような方法を取ることによって、生徒の学習意欲を引き出しながら、基礎的・基本的な知識・技能の習得に繋げることができたと言える。

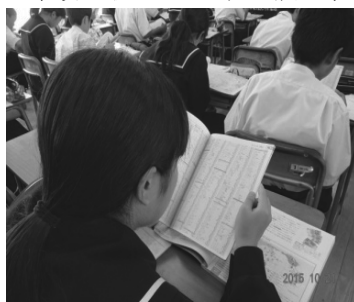
②ペア活動を取り入れた理解確認

第3時間目の「経済成長がいちじるしい中国とインド」の中で、中国が経済特区を設定し、外国の企業を受け入れることが経済成長していった一つの要因であったことを学習した。その際に、経済特区に指定された「深圳」「厦門」「珠海」「海南」「汕頭」の5都市の位置を地図帳を使って確認する作業を行った（資料7）。



【資料7】 地図帳を活用する

地理の学習を進める中で、地理が苦手な生徒は地図が理解できないことに気付いた。そのため、地図を読むことができるようにするためには、一人ではなく、他の生徒と手順を確認し合いながら地図を読むことで、全員が地図を読むことができるようになると考えた。そのため、今回はペアで活動に取り組みさせた。まず、索引を使って地名を調べ、その地名が載っているペー



【資料8】 索引を調べる



【資料9】 地名にマーカーをする

ジ数などを確認する。そして、調べたページの地図のどこに書かれているかを探すが、地図が読めない生徒はここで止まってしまうことが多い。索引に書かれた数字やアルファベットを丁寧に指でたどる作業を行い、地名を探す。その際にはペアで確認しながら行う。この確認し合う作業では、地名がどこに書かれているかの答えを教えてあげるのではなく、答えに辿り着けるようなヒントを出すように指示をした。そうすることで、自分自身も一つ一つの作業を確認しながら、説明することができる。また、理解できているかを自分自身が確認することができる。ペアでの活動が終わり、周りの生徒でできていない生徒がいたら、ペアで行ったことと同様に、ヒントを出してあげるように指示をした。ヒントを出す側の生徒の中で、「今の説明では伝わらないよ」と他の生徒に指摘され、理解しているようで実はあまり理解できていなかったことに気が付くことができた生徒の姿が見られた。ペアなど他の生徒と関わることで行う理解確認の重要性を感じることができた(資料8、9)。

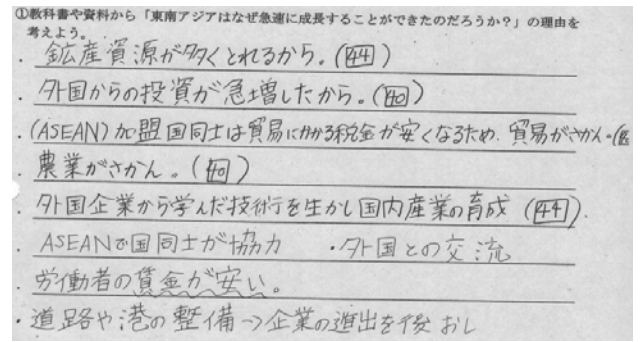
このような方法で取り組んだことで、多くの生徒が地図帳を上手く活用することができるようになり、地名を見つけるまでの時間が徐々に短縮されていった。このことは、生徒たちが地理を学ぶ上で必要となる基礎的・基本的な技能を身に付けることができてきたと言える。

③学習形態の変化による理解深化

「急速に変わる東南アジア」は二時間完了の授業として構成し、一時間目となる第4時間目の授業には教師説明や理解確認を通して東南アジアについての基本的な知識を習得した。二時間目となる5時間目の授業では、深化課題として「なぜ東南アジアは急速に成長することができたのだろうか」を設定した。

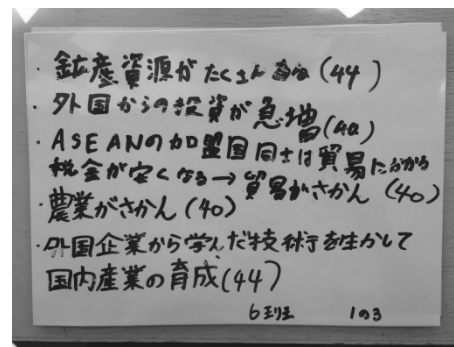
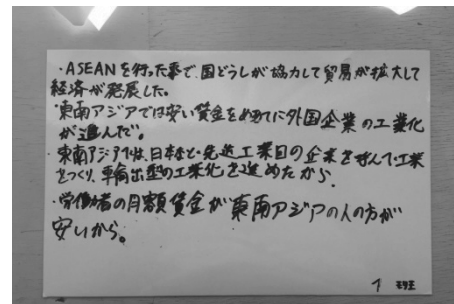
まず、グループ活動に入る前に、隣同士のペアで既習事項の確認を行った。第3時間目の「経済成長がいちじるしい中国とインド」において、経済成長するための条件を考えた。そこでは、「外国の企業を受け入れること」「経済の自由化」「豊富な労働力」などの条件を考えた。そのことを確認し合うことで、本時で考えるための視点を確認した。ただ、ノートをふりかえるだけではなく、それを他の生徒に伝えることで、外化することができる。外化することが知識の定着に繋がる。また、ここでは深化課題を考えるために必要な視点であるため、この活動を行った。

次に、グループになって課題解決のために活動を行った。各グループに5種類の資料を配布した。この配布した資料から参考になる箇所を探したり、この時間までの既習事項をもとに、課題に対する答えを考えさせたりした。このグループで考えたものをホワイトボードに書かせ、各グループの代表生徒に話し合った内容について、ホワイトボードを使いながら発表させた。



【資料10】 生徒のワークシート

(資料10)のようなワークシートは、個人で理由を考え、その後、グループで話し合った際に使用したものである。課題に対する考えをそれぞれ個人で考えて書かせた。今までの学習を踏まえて、考えることができていた生徒が多く見られた。また、考えた理由の根拠となる資料があれば、その資料を明確にしなが、グループで共有した。多くの生徒が、「ASEANの成長」、「外国企業の東南アジア進出」、「自由貿易協定による貿易自由化」、「人件費の安さ」などこの授業のポイントである経済成長の視点を持つことができていた。

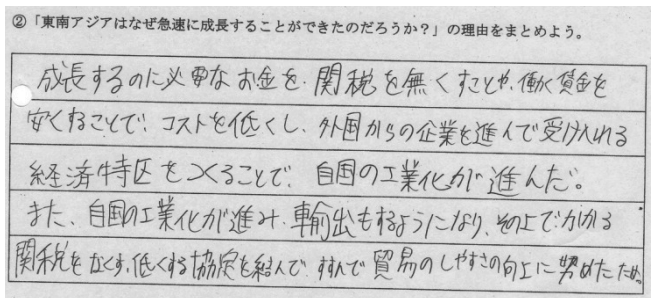


【資料11】 ホワイトボードの活用

ホワイトボードを用いた発表では、配布した資料の抜き出しを箇条書きするだけでなく、配布した資料や前時の学習を踏まえながら、自分の言葉で考えを発表することができているグループや、参考にした資料を明確にしなが、根拠を持って考えを発表することができているグループもあった。多くのグループでは、「ASEANの加盟国同士の貿易にかかる税金を安くしたことで、貿易が盛んになった」、「外国の企業が東南アジアに進出したことで、外国からの投資が増えたから」、「輸出型の産業に変化したから」、「月額賃金など人件費が安いから外国の企業が東南アジアに進出した」などこれまでの学習で習得した知識や視点を踏まえた意見が多く見られた。このことは、これまでの学習が徐々に定着していったためであると言える(資料11)。

④学習カードを取り入れた自己評価

第5時間目の最後の自己評価を行った。授業の中でグループになって考えたり、他の生徒の発表を聞いたりして、考えたことを自分なりの言葉でまとめ、授業への理解を評価させた。



【資料12】 生徒のまとめ

(資料12)のように、「外国の企業を受け入れること」、「関税をなくす協定を結ぶ」など授業の中で習得すべき知識を踏まえ、自分なりの言葉でまとめることができていた。しかし、資料や教科書から抜き出し、書き写しただけのまとめや、ホワイトボードに書かれた意見を箇条書きで羅列しただけのまとめを書く生徒も見られた。このことから、すべての生徒が確実に知識を習得したとは言えない。また、自分の言葉で文章を書くことは継続して取り組まなければならないことであると感じた。

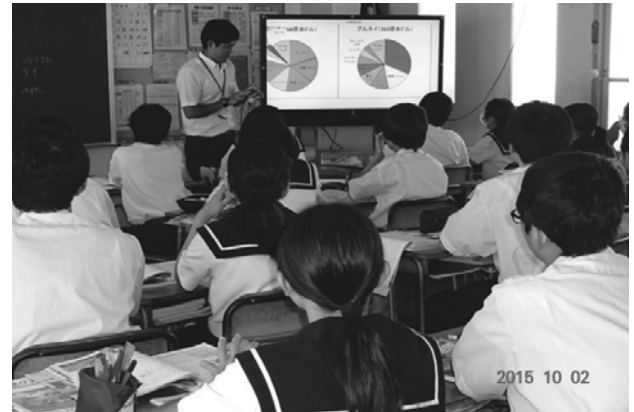
2 実践から見えた成果と課題

(1) 成果

「教えて考えさせる授業」論を取り入れた実践を行った後で行われた定期テストでは、実践を行ったクラスの平均点が学年の平均点を上回り、7クラスの中でも上位の結果であった。このことは、生徒たちが基礎的・基本的な知識を習得することができたと言える。習得サイクルである「教師説明→理解確認→理解深化→自己評価」の流れで授業を継続的に行うことで、生徒に基礎的・基本的な知識・技能を習得させることができた。

教師説明では、教師からの一方的な説明ではなく、生徒との対話を基本として説明を行うことで、生徒も聞くだけの授業から主体的に参加することができる授業になった。その対話を行うために、教科書を活用することは有効であると言える。実際に、教科書を活用し、授業に「なんとなくわかる」状態で参加する授業と、そうでない授業とでは、授業を受ける生徒の反応にも違いがあった。また、生徒たちの理解を手助けする手段として ICT を活用することがより効果的であると感じた。やはり生徒たちはTVなど映像を用いるとしっかりと顔を挙げて授業に参加することができる。今回の実践ではそのような環境を作ることで、生徒を意欲的に授業参加させることができた。また、毎時間の授業の導入において課題意識を持たせること、生徒

の日常生活に結び付いた教材を用いることなど、「なんで」や「なるほど」などの「実感」を持たせることもできた。この実感は学習意欲を引き出すためには不可欠であると感じた(資料13)。



【資料13】 デジタル黒板を見る生徒

理解確認では、習得した知識を外化する活動は自分自身の理解度を確認することになり、知識の習得には有効な手立てだと感じた。知識は学習してから外化することで初めて習得することができる。そのため、ペアで説明し合うなど、自分の言葉で外化する機会を授業の中で作ることは知識の習得には欠かすことができないことが分かった。このことは技能についても同様のことが言える。初めから自分の言葉で説明することは簡単ではないが、継続して続けることで、知識の習得をより確実なものにすることができる。また、ペア活動などの他の生徒との関わることで、生徒自身でどこで躓いているのかが明確になり、メタ認知を促すことになる。分からないことが分かることは知識を確実に習得するためには必要なことである。この理解確認の活動を取り入れることは、知識を確実に習得するためには非常に有効な手段であると言える。

自己評価では、ふりかえりシートを用いて、その時間を振り返ることで、自分が理解していることと理解できていないこと、疑問に感じていることが明確になる。それが知識の習得を助けることになる。また、ふりかえりカードは教師と生徒を繋ぐものでもある。これに記入されたことを添削することで、教師自身が生徒の理解度を把握することができる。そうすることで、授業の改善をすることに繋がる。しかし配慮すべき点として、どのような視点でふりかえりカードを記入するのかを継続的に示し続けなければいけない。ただの授業の感想を書くだけの活動になってしまえば効果がない。その点に配慮しながら取り入れることで有効な手段になると言える。

(2) 課題

今回の実践では、理解深化の活動では、配布された資料を抜き出すだけの活動になってしまっている生徒の姿があった。原因は、課題設定の曖昧さと活動の不明確さにあったと考えられる。課題設定は授業を左右

する大切なものであり、だからこそ、すごく難しく、慎重に設定しなければならない。今回の実践の深化課題「なぜ東南アジアは急速に成長することができたのだろうか」では、生徒にとって考える幅が広すぎて、どの視点で考えればよいのかわからなくなってしまふ。生徒が授業で習得した知識を活用しながら考えられるような課題であったり、生徒自らが考えたいと思ったりするような課題を設定することが追究する価値がある課題であると言える。また、活動の形態も工夫しなければならない。単純にグループを作って活動を行っても、理解できている生徒が意見を出すだけの活動になってしまう。教師説明や理解確認で習得した知識を土台とし、全員が自分の考えを発信できるように環境設定しなければ意味がない。討論形式や、ジグソー学習を含む様々な学習ツールが存在している中で、その課題にあった活動形態を選択していくことが生徒の学びを保障することになる。

また、社会科で養うべき力は「公民的資質」である。変化の激しいこれからの社会を生き抜く上でこの公民的資質はとても大切な資質となると同時に、この力を養うことは社会科の教員の使命でもある。しかし、この力を付けさせることは簡単なことではない。公民的資質を身に付けさせるためには毎時間の授業で積み重ねていくしかない。一時間の授業や一単元の工夫によって、その中で計画的に課題を設定していくことで公民的資質を養っていく。中学、高校ではどうしても受験を意識しなければならない。しかし、この年代だからこそ身に付けさせなければならない資質である。受験を意識しながらも、習得した知識を基に、様々な事象に対して主体的に自分の考えを持つことができるような授業を構想していく。そして、自分たちの生きる社会について主体的に考え、考えたことを基に、行動することができる生徒を育成していきたい。地域をどのように変化すべきかを考えるとところからはじめ、最終的には日本や世界の問題に対しても自分にも関係のある問題として考えることができるよう、生徒一人一人の公民的資質を確実に養うことができるように取り組んでいかなければならない。

V 教職大学院での学びを生かして

この教職大学院では、社会科の授業づくりについて多くのことを学んだ。その学びから、私が目指す授業は「楽しくも、学びのある社会科授業」である。生徒の日常生活に結び付いた教材を用いながらも、学力を保障すること。また、その中でも公民的資質をしっかり養うことができること。これらのことを授業で保障するためには、常に学び続け、工夫した授業づくりを行っていかねばならない。教師である以上、授業で生徒の心を引き付けられるように、授業づくりを行っていきたい。

学校サポーター活動では多くのことを経験させていただいた。現職の先生方の授業や学級経営を参観させていただいたことで、教職大学院を修了し、教職に就いた時にすぐに取り入れることができるような生きた知識を学ぶことができた。また、様々な個性を持った生徒と関わることで、生徒に対する声かけなど支援の方法を思考錯誤しながら実践することができた。それぞれの生徒によって声のかけ方や支援の方法は異なる。生徒の顔を見て、本気で向き合うことで生徒は教師に対して心を開いてくれる。時にはぶつかることもあるが、生徒のために常に本気で向き合うことの大切さを肌で感じる事ができた。

この二年間では多くのことを学ぶことができた。二年間の学びを通して、目指す教師像がはっきりしてきた。「常に生徒に寄り添うことができる教師」である。私は教職大学院終了後、高校の教員として現場に立つことになる。「高校生」という時間は人生においても重要な時間である。その時間を保護者よりも長い時間共にするからこそ、生徒が成長できるように、生徒の近くで、頼りになる存在で在りたい。いつの日か、「先生に出会えてよかった」と生徒から言われるように、生徒に本気で向き合える教師で在り続けたい。

また、社会科の教員として、変化の激しい社会の中で、社会がどのような人材を求めているのか、それに対してどのような力を生徒に身に付けさせればよいのかなど、常に時代の流れを読み、それに伴った授業を行うことができる教員で在りたい。

最後に、私は教師を目指したきっかけである「高校でサッカー部の指導がしたい。」の気持ちも大切にしていきたい。授業づくりだけではなく、部活動の指導においても生徒と本気で向き合い、生徒のためになるような指導をしていきたい。

【参考文献】

- ・『中学校学習指導要領解説 社会編』（文部科学省、2008）
- ・『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（文部科学省、2008）
- ・『高等学校学習指導要領解説 公民編』（文部科学省、2008）
- ・二谷貞夫・和井田清司『中等社会科の理論と実践』（学文社、2007）
- ・市川伸一『「教えて考えさせる授業」を創る 基礎基本の定着・深化・活用を促す「習得」授業設計』（図書文化、2008）
- ・日本教育方法学会『現代教育方法辞典』（図書文化社、2004）
- ・林久人「「活用力」を育む授業づくり―「教えて考えさせる授業」論を取り入れた社会科授業の実践―」（『愛知教育大学教職大学院修了報告書』、2015）